

「諦めさえしなければ、なんぼうでもなる – 3名の大恩人との出会い–」

日本女子大学大学院史学専攻

姜 錫正

2026年3月26日、文化庁による国宝・重要文化財指定の報道発表が行われた。報道発表を受け、各マスコミは特に新指定の文化財のみを大きく取り上げる慣例がある。実は、この指定には新指定のみならず、複数回に亘って追加指定を受けた文化財も含まれている。今回国宝が決まった「醍醐寺文書聖教」の文献史料群の94192点は、その追加指定の1つである。

自己紹介が遅くなったが、筆者は2017年度より総本山醍醐寺霊宝館学芸員として、学業の傍らこの国宝指定業務に携わってきた。京都醍醐寺霊宝館に一括所蔵されている「醍醐寺文書聖教」という文献史料は、大正3年(1914)から文化財調査が行われ、平成元年(1989)にはじめて国の文化財指定を受けて以来、今回で5回目の追加指定が行われた。その結果、約10万3千点の史料の内、合計94192点が国宝指定となった。特に今回の追加指定は、現状としては最後の指定であるため、筆者はアルバイト時代から数えれば醍醐寺の文化財調査歴史の最後の17年間を共にしたとも言える。そして、この指定の年度が筆者にとって特に意味深いのは、この史料群を用いて執筆した博士論文が合格となった年でもあるためだ。

そこで、今回のエッセイには醍醐寺の国宝指定と博士学位修了の同時達成の節目として、筆者の史料調査と歴史研究との出会いに大きく関わった3名の大恩人との思い出を綴ることにした。

博士課程で在籍していた日本女子大学(以下、女子大と略す)は、学部の時からお世話になっていたところであり、日本在住の約19年の内18年を共にした場所である。実は女子大に受験を決めたきっかけはある意味シンプル(もしくは適当だったかもしれない)であった。

まだ韓国で高校生活を送っていた頃、たまたま日本留学経験のある世界史の先生から沢山の日本の話を聞かされたことをきっかけに、日本史を本場で学びたいという夢が芽生えた。そこで、「日本で骨を埋めるつもりで行きなさい」という父との約束を守るべく、高校卒業と同時に単身で日本へ渡ってきた。日本における最初の1年間は受験する大学選びの年であり、たまたま女子大のホームページで目にした当時史学科教授である「永村眞」先生の寺院史研究の紹介文に魅力を感じ、ただそれだけで女子大に出願をした。女子大に向けてなさそうとの周りからの声もあるぐらい受験当初は共学志願が強く、そのため女子大は滑り止めで軽く受けみようという気持ちの方が大きかった。その軽い気持ちで受けたつもりでの女子大とのお縁が、その後の長い日本での生活において重要な3名の大恩人に出会えるきっかけになるとは思いもせずに。

最初に出会ったのは史学科の近世史・博物館専門教授の吉良芳恵先生である。吉良先生とは受験の面接官と受験生として初めて出会った。吉良先生は面接の場を忘れたかのように、ホワイトボードに博物館名や地域名を書きながら「今度ここに一緒に行こうね」、「永村さんを紹介してあげるわ」といったお話

を沢山してくださった。その面接の内容に心地よさを感じて、まだ結果も出ていない帰り道で本命の大学の受験は諦め、女子大に行こうと決心した。そして、後日女子大に合格し、吉良先生のもとで博物館の学芸員が備えるべき知識を学んだ。

吉良先生は面接の場でお話されたことを守るべく、2人目の大恩人であり、日本のお父さんでもある永村先生に「せっかく外国からあなたに学びに来た娘なのだから、きちんと面倒を見てあげなさい」と、裏で筆者の養育を押しつけたようである。吉良先生の強いプッシュのおかげで、気づけば女子大で1年目を終える頃に永村先生の前で寺院史料調査とデータベース構築のアルバイトの面接を受けていた。面接では「漢字は読めるか」のただ1つの質問だけで合格となり、合格間もなくして京都醍醐寺調査の撮影補助業務を任された。その後はすっかり永村先生の調査チームの一員として、醍醐寺をはじめとする奈良東大寺・三重専照寺・和歌山根来寺・大阪金剛寺・青森円覚寺・東京増上寺・京都智積院等の多くの寺院調査に参加し、時には文献史料群の国及び地域文化財指定業務に携わるようになった。永村先生は博士課程1年目を過ごした後に定年退職されたが、その後も陰で博士論文の指導をしてくださった永遠の指導教員でもある。

はじめての醍醐寺調査に際して、今はすっかり筆者にとって日本のお母さんとして大活躍の3人目の大恩人、第2子の産休復帰直後の藤井雅子先生との顔合わせがあった。藤井先生は、永村先生が約40年前に女子大に着任された際の最初のお弟子さんであるので、筆者の姉弟子であると同時に、永村先生の定年退職後からの指導教員でもある。藤井先生は博士論文の指導は勿論のこと、同じ女性研究者の先輩として、自分の研究とどのように向き合うべきか、そして学生や後輩たちをどのようにサポートしていくべきかなど、お姉さんとしての姿勢を沢山伝授してくださった。

この3名の先生方は、筆者がイメージしていた日本人、そして大学教員像とは多少異なり、厳しい指導をくださりつつも、震災や日韓情勢の悪化、あるいは筆者が体調を崩した時には、安否を気遣う電話や差し入れて、心身共に支えてくださった。このように女子大の地縛霊としてすくすくと育っている中で、ある日、ふとしたことから「途中で学業を諦めなければいけないかもしれないです。わははは。」と軽い気持ちで口にした筆者の一言を受け、その場で3名の先生に囲まれ、緊急4者会議が始まった。議題は「この娘（筆者）をこれからどのようにして日本に残せるか」であり、会議の末に永村先生から「諦めさえしなければ、なんぼうでもなる（＝諦めさえしなければ、後はなんとでもなる）」との一言をいただいた。実の娘のように必死に今後のことを悩んでくださる3名の先生の姿と、永村先生からの一言は、当時色々悩んでいた筆者の胸に深く響き、家に帰ってから涙と共に「もっと頑張ろう」という新たな覚悟を決める契機となった。そして、この言葉は今でも筆者の人生の最も重要な座右の銘となっている。

振り返ってみると、醍醐寺の国宝指定と博士学位取得を同時に達成できたのは、この3名の先生方々との出会い、そしてあの4者会議のおかげであると強く思う。その感謝の気持ちを込めて大恩人の吉良・永村・藤井先生にこのエッセイを捧げる。そして、先生方から授かった「諦めさえしなければ、なんぼうでもなる」というこの言葉をもって、次の世代を担う後輩たちを支える先輩としても精進してまいりたい。